

第 19 分科会「国民のための大学づくり」報告

レポートは「北大総長解任から見る大学・社会の危機」（山形定・北海道大学）、「大学設置基準「改正」問題」（光本滋・北海道大学）の 2 本であった。開始直前に「北海道教育大学釧路校の歴史的経緯にみる、教員養成大学の現状と課題」（木戸口正宏・北海道教育大学釧路校）がアップロードされたが、司会者が気づかず、時間もなくなったので口頭報告は行わなかった。また、2 本の報告の質疑応答の後に、高校教員の問題提起によって、高大連携・入試改革などについてフリートーキングを行った。

「北大総長解任から見る大学・社会の危機」（山形定・北海道大学）は、まず、名和豊春前総長解任問題について経過を振り返り、総長選考委員会の決定過程が不明であること、北大構成員が『財界さっぽろ』、『北海道新聞』によって事実を知らされていることの不当性を訴えた。現総長は、総長選挙時には調査を口にしていたものの、就任後の組合の要求に対しては事実究明の意思はないとのことであった。報告の後半では安全保障技術研究推進制度が「デュアルユース」をキーワードに、軍学共同を推進しようとしていること、今年には経済安全保障推進法の 4 分野の中の「技術」に「軍事技術開発への研究者の動員」があること、を指摘した。これを受けて北海道大学では、「国内外の軍事・防衛を所管する機関等との研究の取扱い」（役員会決定、2022 年 9 月 26 日）が通知され、「本学における科学研究は…軍事利用に限定した研究は実施しない」としながらも、「国内外の軍事・防衛を所管する公的機関からの資金提供（再委託を含む。）を受けて研究を行う場合は、別に定める委員会において審査を受けなければならない。」としており、「デュアルユース」を想定して軍事研究へ道を開くものとなっている。前総長が、日本学術会議の「軍事的安全保障研究に関する声明」（2017 年 3 月）を受けて北大の採択研究 3 年目を辞退したことを指摘し、前総長解任問題と軍事研究問題が無関係ではないことを指摘した。

質疑応答では、名和前総長の裁判で提出された北大の資料がほぼすべて黒塗りであったことに驚きの声があった。

「大学設置基準「改正」問題」（光本滋・北海道大学）は、2020 年 10 月 1 日に施行された「改正」大学設置基準は中央教育委員会大学分科会「質保証システム部会」の「新たな時代を見据えた質保証システムの改善・充実について（審議まとめ）」（2020 年 3 月 18 日）を受けたものであるという。「改正」の要点の 1 つ目は「必要な教員を置く」ことから、「必要な教員及び事務職員等からなる教育研究実施組織」の編成としたこと、2 つ目は必要教員（「基幹教員」）数のうち従来の専任教員に相当する部分を 3/4 以上とすることにより、1/4 までを従来の非常勤講師に相当するような教員で置き換えること、あるいは同一大学の教員を複数の学部で「基幹教員」としてカウントすることが可能となる、という内容である。これは私学団体（私立大学連盟と思われる）からの強力な働きかけを背景に行われたとのことで、専任教員の一部を「基幹教員」に置き換えることにより人件費負担を減らすことや、大学内における事務職員の発言力を高めることを通じて、経営主導の改革を進めやすくす

ることがねらいだと思われると指摘した。

質疑応答では、私大教連の交渉結果も紹介され、文科省は、今までの基準を変えるものではない、としつつも新学部・新学科設置に際しては「改正」基準が適用されるとのことであった。また、札幌大学において学部廃止後に教授会もなくなり副学長を中心とした運営が続いていること、週に 14 コマの授業を担当する教員も出てきていることなどが紹介された。教員・事務職員の区分をなくす、という点でも、帯広畜産大学の国葬時半旗掲揚について、大学の立場を事務職員が説明していた例などが紹介された。私立大学における大学運営の非民主化は想像を絶するものがあり、国公立大学との連携の必要を痛感した。

高大連携に関するフリートーキングでは、帯広柏葉高校教員から、高校における主体的な学びと受験指導との矛盾、大学側が高校生に期待する学力とは何なのか、という問題提起がなされた。各大学の入試制度改革の現状についても紹介され、国公立・私立全体では、筆記による学力試験は減少し、AO 入試、推薦入試が増大していること、職業高校から大学に入るルートの現状などが紹介された。高校教員・大学教員の双方が一緒に討論することにより、高校生から大学生への成長過程に即した教育の現状が認識できて、大変有意義な討論であった。ただし、きびしい受験競争に挑む高校生と、AO 入試・推薦入試をめざす高校生、さらには大学には無縁な高校生もおり、教育研究集会として、どのような生徒・学生に焦点を当てていくかを明確にする必要性も感じたところである。

(白木沢旭兎)